

あった症例を経験したので報告する。【症 例】 10ヶ月男児。主訴は発熱、右下肢痛であった。X-2日より発熱があり、X-1日に前医を受診した。解熱剤を使用し経過観察となったが、発熱が継続した。翌X日に前医を再診したところ、右下肢の寡動と右下肢他動運動にて痛がる様子を示した。採血にて白血球数とCRP高値を認め、右化膿性股関節炎を疑い当院紹介となった。初診時、右下肢の自発運動を僅かに認め、他動運動でも痛みは軽度であったが、X線では右股関節の関節裂隙の開大を認めた。エコーガイド下に股関節穿刺を施行し、膿性関節液を認めたため、右化膿性股関節炎と診断した。緊急で切開排膿・洗浄を行い、現在経過良好である。本疾患は早期診断・治療が重要であり、エコーガイド下股関節穿刺が有用性であると思われた。

【特別講演】

座長：高岸 憲二（群馬大院・医・整形外科学）

「非定型大腿骨骨折の疫学と病態」

飯塚 陽一（群馬大院・医・整形外科学）

〈主題II〉小児の上肢の骨折

座長：長谷川 仁（群馬県済生会前橋病院 整形外科）

1. 当院における小児上腕骨顆上骨折後の内反肘変形に対する矯正骨切り術の治療成績

野崎 達也, 永井 彩子, 長谷川 仁
（済生会前橋病院 整形外科）

小児の肘関節の内反肘変形は整容的な問題だけでなく、遅発性尺骨神経麻痺や後外側回旋不安定症を発症する可能性がある。変形の原因は先天性および外傷性があるが、中でも外傷性変形の原因は上腕骨顆上骨折後の変形治療が最も多い。内反肘変形は骨切り部の形態が良好に修復される10歳～12歳頃までに矯正骨切り術を行う必要がある。2005年から2015年までの期間に当院で上腕骨顆上骨折後の内反肘変形に対し矯正骨切り術を行った15歳以下の患者は全部で7症例であった。初期治療は保存例や手術例があり、ほぼ全例でClosed wedge osteotomyにて矯正した。

矯正骨切り術の治療経過について若干の文献的考察を加えて報告する。

2. 小児上腕骨外側顆骨折の手術法について

岡田 純幸, 勝見 賢, 角田 和彦
角田 陽平（深谷赤十字病院 整形外科）

上腕骨外側顆骨折は小児の肘関節周囲骨折の中で上腕骨顆上骨折について頻度の高い骨折である。本骨折に対して観血的鋼線刺入術を行い、手術法について検討した。【症例】 10歳、女児。左上腕骨外側顆骨折（Wadsworth分類type

II）。受傷翌日に全麻下に観血的鋼線刺入術を施行した。術後3週間long arm cast固定を行い、術後12週で抜釘した。内固定後15週で左肘関節の関節可動域は $f5^{\circ}/140^{\circ}$ 、自覚症状は認めていない。手術法には主に経皮的鋼線刺入術、観血的鋼線刺入術、Tension Band Wiring法（以下T.B.W.法）がある。群馬県内の関連施設では一般的にT.B.W.法を多く施行してきたと思われる。T.B.W.法は強固な固定力が得られ、遷延治癒や偽関節のリスクが少なくなる。一方、T.B.W.による成長障害が危惧される。観血的鋼線刺入法は、T.B.W.による成長障害の危惧がないこと、抜釘が容易であることがメリットであり、有用な手術法と考える。

3. 当院における小児肘周辺骨折の近年の傾向

橘 昌宏, 須藤 執道, 細川 高史
永野 賢一, 藤田 浩明

（利根中央病院 整形外科）

【目 的】 小児肘周辺骨折は、小児骨折の中でも頻度が高く、神経麻痺や循環障害、コンパートメント症候群などの合併症、Volkmann拘縮や内反肘等の後遺症の原因ともなる。そのため、速やかな手術加療を含む適切な初期治療が必要となる。当院における小児肘周辺骨折にて手術を行った症例について調査した。【対象と方法】 20歳以下で、2012年4月～2015年3月まで、当院で手術を行った上腕骨遠位端骨折の症例について、年齢、骨折型、受傷から手術までの日数、術後経過（最終ROMや合併症の有無等）を調査した。【結 果】 対象症例は16例、受傷時年齢は平均10.1歳（5-16歳）、骨折型は、上腕骨外側顆骨折5例、顆上骨折5例、内上顆骨折5例、顆部骨折1例であった。手術までの平均日数は、インフルエンザで手術延期になった1例を除いて、平均3.27日であった。術後経過はほぼ前例でROM制限なく、重篤な合併症も認めなかった。

4. 小児期上腕骨外側顆骨折後の成人高度関節症症例に対して人工肘関節置換術を要した経験

綾部 敬生, 清水 雅樹, 伊藤 恵康
（慶友整形外科病院）

【目 的】 上腕骨外側顆骨折は小児の肘関節周辺骨折の中で顆上骨折に次いで多いが、手術的治療が選択される機会は顆上骨折に比してはるかに多い。今回我々は初期の正確な整復と固定が十分でなく成人になって高度関節症を呈して人工肘関節置換術を要した症例を経験したので報告する。【症 例】 62歳、女性。7歳時左上腕骨外側顆骨折受傷。32歳時他医で尺骨神経前方移行術施行。62歳頃から左肘関節痛出現し当院来院。来院時伸展-40度、屈曲110度。握力右：20kg、左：13kg。62歳時人工肘関節置換術施行し肘関節の疼痛は改善し、術後5年時伸展-35度、屈曲135度で経過良好。【まとめ】 上腕骨外側顆骨折は初期には転位が軽度のものでも外固定では骨癒合が得られない場合があり、偽関節形成の結果動揺性をもつ外反肘やそれに続